4章

【問題】（演習）

出典…『続古事談』／東京大学　89年

現代語訳

六波羅の太政入道（と呼ばれた平清盛）が、福原京を造営して、（その新京に主立った貴族たちが）みな移り住んでのち、たいそう時が経って、以前の（平安）京と新しい（福原）京とどちらが優っているかという判定をしようとして、（その当時まだ）平安京に残っている相当に身分のある人々を、（清盛が福原京に）みな呼び下したところ、（集められた）人々はみな清盛の（怒りの）気持ちを（買うことを）怖れて、思っていることはまったく口に出さなかった。（ところが、梅小路中納言と呼ばれた藤原）長方さまだけは、まったく遠慮もせずに、この（福原）京の欠点を挙げて、口も惜しまず手厳しくけなした。そうして、もとの（平安）京の美点を言って、とうとうその日のうちに、かの（清盛という）人の決定によって、平安京へ還都しようということになってしまった。後で、その場に居合わせた上達部が、長方さまに会って、「それにしても呆れ（るほど驚かされ）たことだ。あれほどの気性の激しい人が、（自分では）素晴らしいと思って造営した都を、あれほどに（酷く）もどうしておっしゃったのか。（結果的には清盛公をなんとか）説得して還都の決定があったからよいようなものの、発言の甲斐もなく（清盛公が）怒りでもしたならば、いったいどうなさるおつもり（でいらっしゃったのです）か」と言ったところ、（長方さまは）「その件を、私が（うまくいくだろうと）考えたのには、それなりの事情があるのです。（はっきり駄目だと言うほうが却って）清盛公の意向に沿うだろうと（考えて）こそ、あのように言いました。そのわけは、広く中国・日本（の故事を）考察すると、（傍目に）感心できない新しいことを行っている者は、初めに（その新しいことを）思いついたときには、かえって他人に相談することはありません。（ところが後になって）その行いを少し後悔する気持ちのあるときに、他人に（評価を）問いただすものです。今回のことも、あの（福原）京がたいそう落ち着いた後で、二つの都の（優劣の）判定を行ったのだから、（清盛公は）もはやこの（福原遷都の）ことが悔やまれるようになってしまったのだということを（私は）推察した

のです。だから、どうして言い方を手加減する必要がありましょうか（、いいえ、そんな必要はなかったのです）」とおっしゃったということだ。実際に、その後で（長方さまが昇進について）他人に先を越されようとしたときも、この清盛入道が、（長方さまにとって）よいように申して、「長方どのは格別に物事をよく弁えている人である。簡単に他人に頭越しの昇進をさせるわけにはゆかない」と（言っ）て、後々までも（長方さまを贔屓して）味方をなさったのである。梅小路中納言の両京の定めと（言っ）て、その（還都の）当時の人々の間で評判になったという。

解答

問1 **ア** 相当に身分のある貴族たち

イ 清盛に対して遠慮会釈もなく

ウ 清盛を説得して還都の決定があったからよいが

カ 都が平安京に戻った当時の人々の間でほめそやされた

問2 清盛が一人で断行した遷都について後になって人々に評価を求めたので、清盛が遷都を後悔していることを察したから。〔54字・解答例〕

問3 他者と違って、清盛の権威や激しい気性に臆せず、自信を持って明確に考えを述べた長方に、好感を抱いたから。〔51字・解答例〕

【問題】（自習）

出典…『無名草子』「二七　小野小町」／東京都立大学　87年

現代語訳

「情緒を愛して歌を詠む者は、昔から多くいるようですが、小野小町こそは、容姿も、ふるまいや心配りをはじめとして、どんな点でもすばらしかったのであろう、と思われます。

色見えで……表に現れることはなく色あせ散ってしまうものは、世の中の人の心に咲く（恋という）花であることだなあ

わびぬれば……いま私はうつうつと思い悩んでいて、わが身を憂いものと思っているので、浮き草の根が切れて水に流れるように、悩みを絶って、誘う人がいたらついていってしまおうと思います

思ひつつ……恋しく思いながら寝たのであの方が夢に現れたのでしょうか、夢だと知っていたら醒めずにいたのに

（などと）詠んだのも、女の歌はこのように（あるべきだ）、と思われて、わけもなく涙ぐんでしまいます。」と（私が）言うと、また「（小野小町の）晩年は、とても嘆かわしいですね。それ〔＝小野小町〕ほどでない人でも、そんなにまで（みじめな晩年を）過ごすことはございませんのに」と言う人〔＝女房〕がいるので、（私が）「それにつけても、つらいこの世の無常が思い知られて、しみじみといたわしゅうございます。（小町は）屍になった後までも、

秋風の……秋風の吹くたびごとに、ああ目が痛い、ああ目が痛い。小野にだけとは言わず、（目の中にも）薄が生えているよ。

などと詠んでいるようでございますよ。（この歌は）広い野原の中に薄が生えておりましたものが、（風に吹かれて）このように聞こえたのでした。

（それを聞いた人が）たいそう気の毒に思って、その薄を引き捨てました（その）夜の夢に、『あの頭〔＝されこうべ〕は、小野小町と申す者の頭です。薄が、風に吹かれるたびごとに、目が痛うございましたのに、（あなたが薄を）お取り捨てになったので、たいそう嬉しゅうございます。この御礼に、歌を上手に詠めるようにしてさし上げましょう』と現れたとかいうことでございます。その夢を見た人は、道信の中将（である）と人が申しますのは、本当でございましょうか。（それにしても、小野小町以外の）誰が、そのように（徹底した生き方を）し得ましょうか。情緒の色をも匂いをも深く味わおうとするならば、（死後も）このようにありたいものです

ね」と言うと、（以下略）

解答

問1　①＝こころづかい
　　④＝さめ

問2　②＝接続助詞・仮定条件を表す
　　③＝過去の助動詞・「き」の未然形

問3　「恋」を花にたとえたもの。

問4　恋しく思いながら寝たのであの方が夢に現れたのでしょうか。

問5　(3)　わけもなく　／　むやみに〔別解〕
　　(4)　いやだ　／　不快だ・いとわしい〔別解〕

問6　（屍になった）小野小町が、嬉しいと感じている。

問7　女性たちが自ら、恋に生き歌に生きた女性の典型を求め、晩年は悲惨な死もあるが、死後も歌を捨てない小町の執念と徹底した生き方を評価しようとしている。〔72字・解答例〕

解説

問1　読みの問題。①は「心」＋「遣ふ」の複合語で、連用形からの転成名詞である。「心遣ひ」は、「心を遣ふこと」の意で、「他人などに気を遣う」「心配り」「気遣い」のことである。

④は基本動詞。「覚む」と表記することもある。「覚醒」という熟語を思い浮かべよう。「醒む」には、ほかに「平静になる」の意もあり、「（薫は浮舟を）焦がるる胸も、少し醒むる心地し給ひける〔＝思い焦がれる胸も、少々平静になる気持ちがなさるのであった〕（『源氏物語』）」というふうに使われる。古文では「目が醒める意」として、他に「おどろく」という語が用いられることも少なくない。例えば、「（光源氏は）少し大殿籠り入りけるに、蜩のはなやかに鳴くにおどろき給ひて〔＝少しおやすみになられたが、ヒグラシがにぎやかに鳴くのに目をお醒ましになって〕（『源氏物語』）」などと使われる。ここは「さめざらましを」と、歌の調べを整えるために、あえてこの語が選ばれたのであろう。

問2　文法説明問題。「文法的に説明しなさい」とあった場合、まず品詞を、次にそれが活用する語ならば、その基本形と文中での活用形を、そして助詞の場合は何助詞か〔＝助詞の種類〕を、助動詞の場合は、そこではどんな意味で使われているのか〔＝文法的意味〕を、あわせて記す。傍線部②・③とも一語であるが、二語以上の場合は品詞分解をしたうえで以上の手順で説明すればよい。

傍線部②「ば」は、接続助詞である。活用はしないが、未然形に接続している場合は仮定条件、已然形に接続していれば確定条件を表す。ここは「ば」の直前の語が、「あら」というラ変動詞の未然形なので、仮定条件となる。

傍線部③「せ」は、②とは逆に下に「ば」が来るので未然形または已然形である。「知り／せ／ば」という形が結句の「まし／を」と対応し、反実仮想の構文（もし……だったら……たのに）の構文となっている。「せば」はほとんどが「まし」と対応する場合に用いられ、「未然形＋ば」の仮定条件となるのである。よって、活用形は未然形。また、未然形の「せ」は、サ変動詞「す」という考え方と、過去の助動詞「き」という考え方とがある。難しい問題だが、現在は後者の考え方が通説となっているので、従っておきたい。また、この「せ」は、奈良時代と平安時代の和歌の中にだけ用いられた。用例としては、「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし〔＝この世の中に、もし、まったく桜というものがなかったとしたら、春の人の心はのんびりしていただろうになあ〕」という『古今集』の和歌が有名である。

問3　内容説明問題。「何を花にたとえたものか」という問いから、比喩表現の説明を求められていることがわかる。傍線部(1)は和歌の一部なので、和歌の文脈に沿って言葉を補い、たとえられているものを導く。歌全体の構造から見てみよう。初・二句「色見えで移ろふものは」と提示し、三・四・結句「世の中の人の心の花にぞありける」と謎解きするような構成となっている。「色が表に現れずに」「うつろふ〔＝色あせ散ってしまう〕」ものといえば何？　という問いかけに対し、「それは世の中の人の心の花〔＝心に咲く花〕でしたよ」と解いてみせるのである。「恋の花咲く」といった言い回しをどこかで聞いたこともあるだろうが、「恋心」を「花」に例え、その「花」も自然の花と同じように「うつろふ」ものであると嘆いている歌なのである。

王朝和歌の大きな主題は二つある。「四季」と「恋」である。『古今集』では、全二十巻のうち、「四季」部が六巻、「恋」部が五巻を占めている。小野小町は六歌仙の一人で古今集仮名序にとりあげられた女流歌人の代表でもあった。

問4　現代語訳の問題。傍線部訳の問題は必ず品詞分解をし、単語の意味、文法事項を頭に思い浮かべ、最後に全体が文脈上どんな位置にあるかをよく考えて表現する。

傍線部を品詞に分解すると、「思ひ／つつ／寝れ／ば／や／人／の／見え／つ／らむ」のようになる。品詞分解のうえで注意しなければならない箇所は、「寝れ／ば／や」の「ば」と「や」、「見え／つ／らむ」の「つ」と「らむ」である。

「思ふ」は「恋しい相手を思う」の意。「寝れ／ば」は、動詞「寝」の已然形＋「ば」で、確定条件となり「寝たので」の意。「や」は係助詞。「らむ」との係り結びが成立している。

「ば」と「や」で、「ばや」という終助詞（願望）があるが、この語は未然形接続であり、「寝れ」が已然形であることに注意すれば、「ば」と「や」に切ることができる。

ちなみに、「心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花（『古今集』・百人一首にも所収）」の場合はどうなるだろうか。これも「折ら／ば／や／折ら／む」が正しい。これは「もし折るとしたら折ろうか」の意である。和歌の意味は、「初霜が置いて一面真っ白で、どれがそれかわからないほど私を惑わせている白菊の花を、『折らばや折らむ〔＝折るなら折ろうか〕』」と言っている。この場合は「未然形＋ば」であるから、より一層「ばや」との区別が難しい。「や……む」の係り結び（疑問）に気づくとともに、歌全体の構造（句切れ）への着眼が必要となる。

傍線部の説明にもどる。「人」は「恋しい人」の意。「の」は主格の格助詞で「が」と訳す。「見え／つ」の「つ」は完了の助動

詞。「らむ」は現在推量の助動詞で連体形。ここで係り結びとなり、三句切れとなっている。「や……らむ」で、「……だろうか」という疑問文になる。「つ／らむ」は、「らむ」という終止形接続の助動詞を知っていれば、正しく切ることができる。

問5　単語の意味の問題。(3)・(4)ともに単語としての知識も必要だが、文節の役割に合わせた訳を書くこと。

(3)「そぞろに」は、「そぞろなり」（形容動詞）の連用形で漢字表記は「漫」。「すずろ」という語形もあるが同義である。基本的には「これといったはっきりした根拠や原因がないままに、事や心が進むさまを表す」のである。ここから口語訳は、「なんということもない・関係がない」「むやみに・やたらに」の二つにまとめることができる。「涙ぐましく」に接続する連用形だから、意味も連用形で書く。

(4)「うたて」は、「事態や気持ちがどんどん進行するさま」から「悪い方向に進むのを不快に思う気持ち」をいうことが多い。口語訳としては「気味が悪い・不快だ・気にくわない」などが多い。本文では、小町の「老いの果て」を「うたて」と言っているので、嫌悪感をあらわす言葉ならたいていの表現があてはまる。

なお、用法によって「うたてし」を形容詞、「うたて」を副詞とするのが一般的であるが、本質的には同じ言葉である。これは、(3)の「そぞろに」を副詞とするか形容動詞とするかの相違も同様であって、ここではそうした品詞の違いは問題にされていない。

問6　心情の主を問う問題。こういう問題は、傍線部の前から動作主・会話主などをはっきりと補って訳してくるとわかりやすい。問題文全体から気づいたであろうが、この場面は多くの会話文から成っており、現代語訳に「　」で示した通りである。傍線部(5)の前をたどると、1行前に「その薄を引き捨て侍りける夜の夢に」とあって、傍線部(5)は夢の中での会話文であることがわかる。「かの頭をば、小野小町と申す者の頭なり」と説明したのち、「薄の、風に吹かるるたびごとに、目の痛く侍るに、引き捨て給ひたるなむ〔＝薄が、風に吹かれるたびごとに、目が痛うございましたのに、引き捨ててくださったので〕、いとうれしき」と、自ら小野小町の化身であることを告げている。

問7　問題文全体の内容から要旨を読み取り説明する問題。設問文に「小野小町を例にして、この憂き世を生きる支えとして何を求め、何を評価しようとしているのですか」とあり、これが解答作成のための土台である。まず、これを利用して本文に分析を加えてい

く。そして、「何を求め、何を評価」という箇所にあてはまる内容を本文中から見つけ、最後に字数を七十字前後に調整しつつ設問文の質問形式に合わせて完成させるという手順になる。

それでは、まず、本文の「小野小町」について書かれている部分に分析を加えてみよう。本文1行目に、「小野小町こそ、〜」とあって、小町の特徴・個性・評価などがまとまっていることがわかる。これは、ある人物〔＝作者〕の最初の発言である。この発言は、本文冒頭「色を好み歌を詠む者、」から、6行目「そぞろに涙ぐましくこそ」までになる。この発言では、「小野小町こそ……何事もいみじかりけむ」と、小町が女性としてあらゆる点ですぐれていたということを述べ、そして、三首の「恋」を主題にした和歌を並べて、それに対して、「女の歌はかやうにこそ、とおぼえて、そぞろに涙ぐましく」と評価し、「恋」と「歌」に生きた女性への絶賛の言葉があるとみることができる。したがって、この本文の前半部には「恋に生き歌に生きた女性の典型」が示されているといえよう。これが、設問文の「問題文は、小野小町を例にして、この憂き世を生きる支えとして何を求め」たのかに該当する答えの核となる部分である。設問文の「問題文は」も、「問題文中に登場し発言する女性たちは」と言い換えることができるので、女性たち自身による小野小町の、女性としての典型・理想像といったものが述べられていることになる。女性は、「憂き世を生きる支え」として小野小町的な生き方〔＝恋と歌に生きる人生〕にあこがれたわけである。

さて、本文の後半、6行目に、「また、老いの果てこそ、〜」と、別の女性らしい人物によって小町の晩年のみじめな姿に話題が及ぶと、それを受けて、「それにつけても、憂き世の」から始まり、最終行まで、小町の晩年・死後の落魄ぶりを語る人物が話をしめくくる。話し合う女性たちにとって、この後半の部分がよりいっそう小野小町の女性としての徹底した生き方への共感を呼んでいるようなのである。

本文最後から二行「誰かは、さることあるな。色をも香をも心にしむとならば、かやうにこそあらまほしけれ」の「かやうに」は、「死後もこのように歌を捨てない」といった意味であり、女性としての生き方を死後も徹底して貫いたという解釈であり、そうした評価が「あらまほし」なのである。後半部の、小町の死後の逸話はあまりに残酷な話である。若き日の美女が生きながらえ、老婆になり、無残な死骸となるという言い伝えは、もともと仏教の教理を説くために都合のよいものであったために広まったらしいのだが、この『無名草子』においては、女性が恋と歌に生き「死後もその生き方を貫いたこと」への評価となっている。これが、設問文の後半「何を評価しようとしているのですか」に対応する答えの核となるのである。

それぞれの答えを組み合わせると、「女性たちが自ら」「恋に生き歌に生きた女性の典型を求め」「晩年は悲惨な死もあるが、死

後も歌を捨てない小町の執念と徹底した生き方を評価しようとしている。」との解答に至ることができる。字数は七十字前後とあり、あまり気にせずに四捨五入して七十字になるようにしておけばよいだろう。

●メモ●

5章

【問題】（演習）

出典…『続墨客揮犀』／　東京大学　06年

書き下し文

余が友劉伯時、嘗て淮西の士人楊勔に見ゆ。自ら言へらく中年にして異疾を得、発言応答する毎に、腹中輒ち小声の之に効ふ有り。数年の間、其の声浸大なり。道士有りて見て驚きて曰く、「此れ応声虫なり。久しく治せざれば、延きて妻子に及ばん。宜しく本草を読むべし。虫の応ぜざる所の者に遇はば当に取りて之を服すべし」と。勔言のごとくす。読みて雷丸に至れば、虫忽ち声無し。乃ち頓に数粒を餌せば遂に愈ゆ。余始め未だ以て信と為さず。其の後長汀に至り、一丐者に遇ふ。亦た是の疾有り。環りて観る者甚だ衆し。因りて之に教へて雷丸を服せしめんとす。丐者謝して曰く、「某貧にして他技無し。衣食を人に求むる所以の者は、唯だ此を借るのみ」と。

現代語訳

我が友人劉伯時は、以前淮水の西方地域の官吏楊勔に会った。（楊勔が）自ら（の体験談として）言うには、四十歳前後に奇妙な病にかかって、言葉を発したり（何かに）答えたりするごとに、（自分の）腹の中からすぐさま小さい声でそれに倣う〔＝復唱する〕ものがある。数年の間にその声が次第に大きくなる。（ある）道士がいて（それを）見て驚いて言う、「それは応声虫だ。そのまま療治しないでいると、（それが周りの者を）引き寄せて妻子に及ぶだろう〔＝妻子をはじめとする周りの者にも伝染するだろう〕。ぜひ本草（の書物）をお読みなさい。（所載の薬材の中で）虫が応えない〔＝復唱しない〕ものに出会ったら、必ず（その薬材を）手に入れてそれを服用しなさい」と。楊勔は言うとおりにした。（本草の書物を）読んで「雷丸」（の項目）に至ると、（応声）虫は急に声がなくなった〔＝応えなくなった〕。そこで一度に（雷丸）数粒を服すと、結局完治した（という話だった）。私は始め（その応声虫の話を）

信用していなかった。その後長汀に行くことがあって、（たまたま）一人の物乞いに会った。（楊勔と）同様にその病にかかっていた。（腹の中から声が応ずるその物乞いを）取り囲んで観ている者が沢山いた。そこで（私は）その物乞いに（治療法を）教えて雷丸を服用させようとした。（しかし）物乞いは（私の教示を）辞退して言う、「私は貧しくて（この応声虫の見世物以外に）他の特技もありません。衣食を人に施してもらう手段は、ただこれにすがるほかないのです」と。

解答

問1 私が言葉を発したり何かに答えたりするたびに、私の腹の中からすぐさま小さい声でそれに倣うものがいる。〔49字・解答例〕

問2 本草の書物を音読して、腹の中から復唱する声のしない薬剤を服用することが応声虫を退治する方法だということ。〔52字・解答例〕

問3 （楊）勔

問4 物乞いの腹の中からその口真似の声がするのが面白いので、大勢の人々が物乞いを取り巻いて見物している様子。〔51字・解答例〕

問5 応声虫の見世物以外に生活の手段のない物乞いにとって、作者の提案を辞退せずそれに従って応声虫を退治すると、人々から施しを受ける方法を失ってしまうから。〔74字・解答例〕

【問題】（自習）

出典…白居易「河南亂（乱）を經（経）て、關（関）内飢えに阻みてより、兄弟離散して各おの一處に在り。因りて月を望みて感ずること有り、聊か懐（懐）ふ所を書し、浮梁の大兄・於潛（潜）の七兄・烏江の十五兄に寄せ上り、兼せて符離及び下邽の弟妹に示す。」

（『白氏文集』巻十三所収）　／　千葉大学　前期　95年・改題

書き下し文

時難れ年飢えて世業空しく、
田園寥落す干戈の後、
影を弔して分れて千里の鴈と爲（為）り、
共に明月を看て應（応）に涙を垂るべし。

弟兄羈旅して各おの西東にあり。
骨肉流離す道路の中。
根より辭（辞）れて散じて九秋の蓬と作る。
一夜鄕心五處に同じ。

現代語訳

「河南の地の内乱によって関内（函谷関より西の地域）は飢えに苦しみ、兄弟は離散してそれぞれ別の地に暮らしている。そこで、月を見て感慨を覚えたので、その思いを書きつけて、浮梁の長兄、於潛にいる七番目の兄、烏江にいる十五番目の兄に差し上げ、さらに符離と下邽にいる弟や妹たちにも見せた詩」

戦乱によって飢饉となり、先祖代々続けてきた仕事もなくなり、兄弟たちは旅に出てそれぞれ異郷の地で西東に別れて暮らしている。

戦乱ののちに田園は荒れ果て、われわれ兄弟は旅の空にさすらっている。

自分の孤独な姿を哀れみ眺めれば、群れを遠く離れてさすらう孤独な雁のようであり、根から離れて秋風に吹かれてあてどなくさまよう蓬のようである。

今夜ともにこの明月を見て誰もが涙しているに違いない。五箇所に別れて住んでいても、望郷の念は兄弟みな同じく抱いていることであろう。

解答

問1　離散して寄る辺のない孤独な境遇にある兄弟。〔解答例〕

問2　兄弟たちの今夜の居場所は五箇所に別れてはいても、望郷の念を抱く点ではみなきっと同じ気持ちにちがいない。〔解答例〕

問3　ともにめいげつをみてまさになみだをたるべし。

問4　詩型＝七言律詩　／　押韻の字＝空・東・中・蓬・同

解説

問1　まずこの詩のテーマを考えてみよう。詩題および第二句「弟兄羈旅各西東」から、「一家離散」を嘆いた詩であるとわかるはず。また、この詩は律詩だから、傍線部(1)を含む第五句と傍線部(2)を含む第六句は対句である。第五句に「分」、第六句に「散」とあり、合わせて「分散」となることから、やはり「家族」、この場合は、「兄弟」が「分散」、すなわち互いに離別状態にあることがわかる。すると「千里鴈（雁）」も「九秋蓬」も離別してそれぞれ一人でいる兄弟のことを表していると判断できる。「鴈（雁）」と「蓬（根なし草）」は、「孤独な境遇」を暗示する、詩でよく使われる語。この知識がなくても、この詩の場合は、第五句「弔影」の注に、「極めて孤独なたとえ」とあり、ここから判断できるだろう。

まとめるポイントは二つ。一つは、「兄弟たちが離れ離れになった」という指摘。もう一つは、「孤独」とか「一人ぼっち」という境遇の指摘。これで十分だが、もう一つあえて加えるとすれば、第六句の「辭根」から、「本来は一箇所〔＝根〕で暮らすべき兄弟が、そこから離れて〔＝辞〕いるために、不安である」ということ、あるいは、まだ戦乱が続いている中で離別しているのだから、「次にどこへ行くかも定かではない」「寄る辺のない身の上」ということである。

漢詩の読解問題は往々にして、詩に直接書かれていないことを書かなければならない。読み取った内容、つまり、どう読めたかということを書く（選ぶ）のである。その際に重要なのは、①　論拠（本文中の解答の根拠となる箇所）の発見、②　論拠からの論理的推理、そして、③　人間の一般的な思考・行動パターンからはずれない、ということである。①と②については述べてきた

通りだが、③は、例えば、この詩について、「仲の悪い兄弟もいるんじゃないか?」と考えてはいけないということである。ここでは、「兄弟が離れ離れになると、兄弟全員が早く一緒に暮らせることを願う」という一般的な思考パターンからはずれた解釈をしてはならない。

問2 この詩は、一句あたり七文字だから、七言詩である。七言詩は、一句を「二字／二字／三字」で切って読む。これは、リズムの切れ目とともに、意味の切れ目でもある。すると傍線部(4)は、「一夜」「郷心」「五處同」と、意味を分けることが出来る。

「郷心」は、下の注に「故郷を思う気持ち」とある。「望郷の念」と短い表現に直す。

「一夜」は「ある夜」の意味だが、ここでは、「今日この夜」つまり「今夜」で良いだろう。詩の前に書かれた詩題に「望レ月有レ感、聊書レ所レ懷」と書いてあり、「所レ懷」の内容がこの詩であるからだ。

「五處同」は、「五處」が何かわかれば簡単。詩題に、「浮梁大兄」「於潛七兄」「烏江十五兄」とまず三人紹介してあり、次に「符離及下邳弟妹」と二人いることが書かれている。兄弟は合計五人、つまり五箇所である。これが「五處」に相応する。

そこで、逐語訳すると、「今夜望郷の念は五箇所で同じ」となる。

これに省略された語を補い、前後の文脈から状況をつけ加えると次のようになる。

「(兄弟たちは)今夜、(それぞれ居る所は)五箇所に(別れバラバラだが)、望郷の念(を抱くことは皆)同じだろう」。

括弧の中が省略された語だが、主語は「兄弟たち」。「五處」は、「今夜いる場所」という意味を補うとわかりやすくなる。「望郷の念」に「抱く」という述語を付け加えた。「皆」は「全員一人も欠ける所もない」という意味。傍線を引いた「だろう」は、作者の白居易は、当然のことながら、兄弟の様子を目の前で見ているわけではないので、推量を示す「だろう」を付け加えた。〔解答例〕で、「きっと……にちがいない」と強い推量になっているのは、第七句(傍線部(3))の「應(応)」(「まさニ……すべシ」)が、第八句までかかると考えたからである。これは「二句で一文」の原理から考えたもので、第七句の「強い推量」が、第八句にもそのままかかると考えた。しかし、解答としては、「だろう」でも許容。

問3 白文を書き下し文にする問題だが、返り点は付いているので楽。まず動詞を探すと、「看」と「垂」。「看」の上の「共」は、返り点がないことから副詞とわかる。読みは「ともニ」で良い。「垂」の上の「應(応)」は再読文字「まさニ……(終止形／ラ変型

活用語――連体形）ベシ」。「垂」は下に「涙」があることから、「流す」という意味だとわかるだろう。そこで「たル」と読む。「涙」は目的語となり、「涙ヲ」となる。ここで、「涙を」なら「垂らす」ではないかと考える人もいるだろう。「垂らす」は現代語なのである。「垂る」は、古語の場合、四段活用ならば自動詞であるが、下二段ならば他動詞になる。「看」は「みル」だが、下に続くので、連用形にして「みテ」とする。

したがって、傍線部(3)は、「共に明月を看て應に涙を垂るべし（……「共看(ともニみテ)明月ヲ應(まさニ)垂(たル)レ涙ヲ。」）となる。

問4　形式と押韻の問題。押韻は詩の形式によって決まる。五言詩ならば、偶数句末、七言詩ならば、初句（第一句）と偶数句に韻が踏まれる。

この詩は、七言詩で、八句あるから律詩、形式上の名称は「七言律詩」。初句末「空」と偶数句末「東、中、蓬、同」が押韻の字。すべて音読みにして、「クウ」「トウ」「チュウ」「ホウ」「ドウ」と、語尾の「ウ」の部分が共通していることも一応確認しておこう。

L2J
高２東大国語

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製